

19世紀後半から20世紀初頭のワルシャワにおける児童保護活動と ヤヌシュ・コルチャックの孤児院

○ 北海道大学大学院教育学院 大澤 亜里 (8168)

キーワード：ワルシャワ、児童保護活動、ドム・シエロット

1. 研究目的

本研究は、ヤヌシュ・コルチャック（1878～1942）が院長を務めた孤児院ドム・シエロットの特徴を明らかにし、その意義を検討することを目的とする。そのためには当時の社会的背景を踏まえる必要がある。そこでまず19世紀後半から20世紀初頭のワルシャワにおける児童保護問題およびその対応について明らかにし、その中にドム・シエロットにおける保護活動を位置付ける。

ヤヌシュ・コルチャックはユダヤ系ポーランド人としてワルシャワに生まれ、作家、小児科医、社会活動家として幅広く活動すると同時に、ユダヤ系児童のための孤児院として1910年に設立されたドム・シエロットの運営にも長年携わった。このドム・シエロットが設立された当時、ポーランドはロシア、プロイセン、オーストリアの三国によって分割されており（1795～1918年）、社会状況は支配国の政治やそれぞれの土地の性格によって様々であった。本研究は、ロシア支配下にあったワルシャワでは児童保護をめぐって何が問題とされていたのか、またそれに対してどのような対策が取られていたのか明らかにする。その上で、コルチャックの活動の拠点であったドム・シエロットの意義を検討する。

2. 研究の視点および方法

本研究は、コルチャックの生涯にわたる活動を、ドム・シエロットにおける実践を中心に据えながら明らかにする研究の一環として、その設立から運営初期に焦点を当てている。

研究の史資料として、ドム・シエロットについては、設立母体である孤児救済協会の年次活動報告書および同協会が作成した冊子と、コルチャックの著書、ドム・シエロットの新聞等を用いる。また当時のワルシャワの状況については、ポーランド独立前（1918年まで）に出版された史料と同時に、第二次世界大戦後に出版された研究書も活用する。

日本において、原語による史資料を用いたコルチャック研究はほとんど存在しない。ポーランドにおいては、彼の思想研究および実践研究ともに多数存在するが、時代背景や社会状況に関する言及が弱く、その評価は一方的であると考えられる。そこで本研究は、上記の史資料を活用しながら進めていく。またヨーロッパの社会福祉史研究の中で、イギリスに関しては蓄積があるが、他国、特に東欧に関しては皆無に等しい。コルチャック研究を通してポーランドの児童福祉史の一端を明らかにしたい。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会の「研究倫理指針」に従って研究を行う。先行業績の検討に際しては自説と他説とを峻別し、研究に用いる史資料は当日配付する資料に原著者名・文献・出版社・出版年・引用箇所を明示する。

4. 研究結果

(1) 慈善団体および社会組織による児童保護活動

19世紀後半、都市化と工業化が進むワルシャワでは人口が急激に増加した。それに伴って貧民街が増大し、孤児や棄児、浮浪児、貧しい家庭の子どもや母子の保護に関する問題が出てきた。そうした問題の対応に大きな役割を果たしたのは慈善団体や社会組織であった。1814年に設立されたワルシャワ慈善協会を発端に、ワルシャワ公衆衛生協会（1864年）、子どもの友協会（1880年）、貧しい母子の保護協会（1884年）や子どもの保護協会（1906年）など数多くの団体が組織され、児童保護活動を行った。

(2) 様々な形態の児童施設

当時最大規模であったワルシャワ慈善協会は、孤児院、乳児施設、保護施設、裁縫教室、学習教室、無料図書館を多数運営していた。その他にも棄児のための施設や貧しい母子のための施設、矯正施設など様々な形態の児童施設が存在した。

(3) ドム・シエロットとその他の孤児院

1896年の時点でワルシャワ慈善協会は男子用5、女子用6の孤児院を運営していた。その他にも慈善修道女会が運営するカトリック系女子のための孤児院や、労働者階級の男子、プロテスタント系やユダヤ系の児童を対象にした孤児院などいくつか存在した。一般に孤児院では、男子に初等教育と職業訓練が、女子には読み・書き・計算の他、家事仕事の訓練が施された。

ドム・シエロットは孤児救済協会が運営するユダヤ系孤児院であり、その運営目的は、家庭の養育能力が欠如しており、知能・身体・道徳上に問題のない“社会的利益”が期待できる子どもを養育し、手に職をつけさせ自活していけるようにすることであった。他の孤児院と同様、教育および職業訓練の機会が与えられた他、ドム・シエロットの敷地内には裁縫教室があり、入居者のみならず外部の子どもたちも利用した。また数人の子どもと貧しいユダヤ系家族が共同生活を送る“オグニスコ”と呼ばれる住居が敷地の内外にあり、ドム・シエロットでの共同生活から敷地内の“オグニスコ”での生活、そして敷地外の“オグニスコ”での生活と、段階を経て巣立っていけるような仕組みがあった。

5. 考察

当時のワルシャワはロシアの支配下にあり、国からの援助が期待できなかったため、慈善団体や社会組織が数多く設立され、それぞれの目的に応じた保護活動があらゆる形態で行われたと考えられる。ワルシャワ慈善協会のように貧しい人々に対して様々な形態で救済にあたる団体もあれば、対象を宗教・宗派によって、また労働者階級や母子家庭などに限定して特定の保護活動を行う団体もあった。ドム・シエロットの設立母体である孤児救済協会はユダヤ系児童を対象にした専門化された団体であったが、孤児院事業だけでなく裁縫教室や“オグニスコ”の運営など、いくつかの形態を組み合わせた点が一つの特徴といえる。